体験通し自身を育てる

中学校の修学旅行や教育旅行は大きく様変わりしてきた。単に見る行為から一歩進んで自ら五感を使って何かを感じ取る体験が主流となった。あるいは、核家族化で希薄になった人間関係を、肌で感じる民泊も人気が高い。一方で、多感なこの時期だからこそ、日本の歴史や文化に触れて、知識と日本人の生き方を自ら感得する必要性が、グローバルな世界では改めて問われている。学校が求め、実施している旅行とはどのようなものか。目的や教育的意図、効果などを取材した。

佐野日本大学中等教育学校
新潟県上越市　5泊6日
10年6月　実施

農家の指導のもと、農機具の操作を体験した

笑顔あふれた農村体験

初めての農山漁村研修
民泊で自主性の芽生え

佐野日本大学中等教育学校（小林正弘校長、全校生徒369人）は、佐野日本大学中学校を元に今年4月、6年制の中等教育学校として新たなスタートを切った学校だ。野球の強豪として知られる佐野日本大学高等学校に隣接し、栃木・佐野の豊かな自然に囲まれた学び舎で、一人ひとりの個性と長所を伸ばす教育を実践する。

同校の教育は、6年間の「国内短期留学」を実施する。この宿泊研修は、1学年約120人が40人程度のグループに分かれ、農村、山村、漁村の3コースごとに、集団生活や民泊を通した土地の人たちとの交流、生業体験を行うものだ。

2年生の宿泊研修としては佐野日大中時代、中世の英国を再現した研修施設「ブリティッシュヒルズ」（福島県天栄村）で研修を開始。この研修は、2、3、4日目は全員でジャガイモの収穫と田植え、ジャガイモアイスクリームやソバ料理作りなどを体験。農作業用のつなぎを借りて農機具を使い作業と柏倉教諭。丸1日の農作業と2泊の民泊を通し、生徒は受け入れ農家の人との間で一から人間関係を作ることを経験。農家にすっかり溶け込んだ民泊生活の中、生徒が自分で考え互いに助け合って活動したことで、一人ひとりに自主性が芽生え、学校生活でも自ら考えて動く生徒が増えたという。さらには、他の生徒を引っ張る「リーダー役」として動ける生徒も新たに出てきた。また1学年をクラスに関係なく3つに分け活動したことでクラスの垣根がなくなり、学年のまとまりも生まれた。

柏倉教諭は、「ブリティッシュヒルズでの研修とは違い、『思いやり』『助け合い』『やさしさ』、そしてなにより『生きる力』を学んだのではないか」と農山漁村研修ならではの教育効果を指摘する。

初めての農山漁村研修を無事に終えた同校。しかし、3コースに分かれることでコースあたりの引率教員の人数が2人ほどに減少するため、体調不良の生徒が出た場合などに教員らがどのような態勢をとって対応するのかなど、今後の課題も見えてきた。

今年の国内短期留学は、同校の教育計画通り、2年生が10月に実施する。その際には、3年生が6月に植え、受け入れ地域の人が世話をした稲を2年生が収穫する予定だ。

同校には、上越市から生徒の植えた稲の成長の様子を写した写真が継続的に送られてきている。生徒たちは稲の写真を見ながら、技術の授業で報告書を作ったり、グループごとの研修成果を模造紙などにまとめたりしている最中だ。植えた稲が立派な米になって送られてくるまで、同校初の農山漁村研修は続いていく。

柏倉豊教諭

泥につかっての田植え体験

ジャガイモの収穫作業

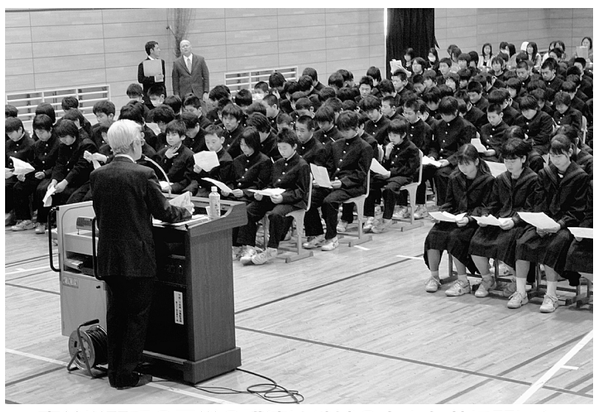
つきたての餅を丸める生徒たち

震災学習で命の意味
生き方の大切さを学ぶ

野田市立 北部中学校
関西地区　2泊3日
10年5月　実施

千葉県の野田市立北部中学校（横山正樹校長）は、5月10日から2泊3日で関西方面の修学旅行を実施した。同地域の中学校は、京都と奈良が定番の旅行先。同校も体験学習などの見学方法、伝統芸能に触れる見学先の工夫はしていても、おおむね従来の路線を踏襲してきた。だが、今年は違った。京都と奈良のほかに神戸を加えた。「新幹線に乗るのが初めての生徒も少なくない。神戸のホテルに宿泊するだけでも貴重な経験」（小泉城一教諭）だが、真の目的は神戸での「震災学習」にあった。

地震列島と呼ばれる日本――震災は全国に共通するリスクの1つだが、現実に起こり得るにもかかわらず、ややもすると忘れがちなのが震災への心構えだ。しかし、日常の生活環境の中でリスクを想定するのは難しい。例えば同校が位置する野田市は、千葉県の最北端で南北に細長く伸びた市域の東を利根川、西に江戸川、南は利根運河で周囲三方が川に囲まれている。市の南は江戸時代から醤油の産地として知られ、北は江戸への水路の要衝だった。そんな地勢の緩衝地帯とも言えるほぼ中央に、同校がある。学校周辺は住宅地と田畑が混在しており、緑に恵まれたのどかな環境だ。


事前学習での震災の講演は地域の人々も共に聞いた

小泉城一教諭

神戸市内の「人と防災センター」で〝語り部〟の東田せつ子さんは6434人が犠牲になった震災で九死に一生を得た体験談を語る㊧。生徒らはコーラスでお礼㊥。そして震災学習で得た体験を「今まで考えもしなかったことを考えるようになった」「被災した人たちの教訓を生かし役立て、人と人が助け合えるようにしていきたい」などと事後学習のリポートにまとめた㊦。

そうした中で営まれる日常生活で、リスクが意識下に埋没するのも不思議はない。だが、学校経営のリスクマネジメントとして、横山校長は言う。

「本校は風水害や地震、大規模事故などの時に、地域の避難場所に指定されている。大災害が発生して学校が避難所になったときに、どう対処したらいいのか」と。その答えも分かっている。「普段から地域一体で意識を高めておくことが必要」であり、生徒と保護者と学校が一体になり、災害を乗り切る心構えを養うことにほかならない。

その機会は、修学旅行の事前学習の場として実現した。プロローグは昨年夏、今期の修学旅行担当の1人である小泉教諭が、阪神淡路大震災をテーマにした「震災学習」を、実際に体験する機会を得たことだった。「震災直後の神戸では、当たり前の日常生活ができなかった。そうした時に人々はどうやって苦難を乗り越えたのか。同じ世代の子どもたちが震災をどう受けとめて、どう行動したかを学ぶことは大変意義がある。同時に、周囲の当たり前と思われることに感謝の気持ちを持って生活することを伝えたい」と小泉教諭は、震災学習のもつ多面的な意義を確認した。

そして、事前学習が進められ、その一環として神戸市から講師を招いて震災体験談を聞くことになった。講師派遣にはFeel KOBE観光推進協議会が実施していたのは人々の心＝大震災を乗り越えた生徒・親・先生たち」と題して行った。

会の期日と修学旅行の実施時期などで規定に合わないなどの問題もあった」（眉山俊敬教頭）が、それもクリア。3月の学期末保護者会と講演会の同時開催が実現した。

事前学習の講演会は、（眉山教頭）。地域一体感の創出に向けた企図は、神戸市教育委員会震災学習交流センターの近藤豊宣氏（元神戸市立鷹取中学校長）が「人々を救った学校が現実の避難場所となり、そこで繰り広げられた赤裸々な人間模様。そこから引き起こされたさまざまな不測の事態。そして、救済活動にあたった教師や生徒が、人間としてのあり方や生き方が試された話は「生徒だけでなく聴講した地域の人々が等しく衝撃と感銘を受けた」進協議会が実施していた「語り部助成金」を利用することにした。「講演内でそれぞれ班別自主研修。宿泊は初日が京都市内の東寺洛南会館、2日目が神戸市内の神戸ポートピアホテルだった。そして3日目に市内の「人と防災センター」を訪れ、震災の〝語り部〟として活動を続ける東田せつ子さんから、当時の生々しい話を聞いた。東田さんの「いつ起こるか分からない災害に対して心構えをもってほしい」との訴えは、改めて生徒たちの心に焼きついたようだ。

小泉教諭は「震災学習は修学旅行で神戸を訪れることがなければ、考える機会さえないかもしれない。地震のメカニズムや地震後の惨状などは映像で確認できるが、そこで被災した人たちの生活にまではなかなか認識が及ばない」とした上で「被災した方から事前と当日の2回、実際の話を聞けたのは大変貴重な機会だった。生徒たちも少なからず、被災した人たちに共感ができ、自分たちの身の備えと、世界中で起きている地震災害に対して自分たちに何ができるかを問い直したに違いない」と振り返る。

22年度実績（予定も含む）

	中学校	小学校
グリーンシーズン	37校	10校
ウィンターシーズン	2校	18校

＊体験活動事例集差し上げます
●春～秋の自然体験活動だけでなく、スキー・スノーシューを中心とした冬の雪国体験も実施しています。

随時、視察受入をしております。
資料請求・詳細はお問合せ下さい。

うおぬま体験交流推進協議会
事務局　財団法人　魚沼市地域づくり振興公社
〒946-0304　新潟県魚沼市穴沢 215-1
TEL025-798-4566　FAX025-796-2775

約150件の受け入れ登録農家はすべて、農家民宿・簡易宿所の許可を取得しています。
安心・安全がモットーの南会津町が推奨する自慢の民泊体験です。

福島県南会津農村生活体験推進協議会
事務局　みなみやま観光株式会社
〒967-0004 福島県南会津郡南会津町田島字後町甲3973-1 FAX 0241-62-7788　E-mail info@minamiaizu.co.jp
TEL 0241-62-2250 http://www.minamiaizu.co.jp/